

# 『坊っちゃん』論

— 明るさの奥に潜むもの —

増 満 圭 子

## 要 旨

夏目漱石『坊っちゃん』の冒頭は、「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている」と始まるが、この一文には、「坊っちゃん」の痛々しいほどの虚勢が表されている、と、読むことができる。生まれ育った東京は、「坊っちゃん」にとつて決して優しい場ではなかった。にもかかわらず、四国に赴任してからも、何かについて、「田舎」を嫌い、「東京」に固執する。そこには、過去に起こした「無鉄砲」なるいたずらを、さも自慢げに思い出語りしていたのと同様、単なる「笑い」をもって読み進めるだけでは済ますことのできない、ある哀しさが伺えよう。本論は、作者漱石の執筆背景を鑑みつつ、「坊っちゃん」における「いたずら」の意味、「清」との関係性、「田舎嫌い」に込められた心情などについて読み解きながら、作品に描かれている意識世界を考察したものである。

## はじめに

夏目漱石『坊っちゃん』は、一九〇五（明治三十九）年「ホトトギス」に掲載された作品である。

漱石が作家として初めて執筆したのは『吾輩は猫である』だが、その『猫』連載中と同時期に、「倫敦塔」・「琴のそら音」など、後に『漾虚集』として纏められる作品が次々と発表されており、この『坊っ

ちゃん』もまた、『猫』連載開始明治三十八年の翌年、まだ脱稿完成（七月）より四ヶ月も前の発表なのである。

これまで、『坊っちゃん』については、佐藤泰正が「なかなか位置づけのむつかしい作品」、「従来の漱石論一巻に、「坊っちゃん」論をもつて一章を立てたものが殆んど見られぬことによつても、その一面はうかがわれよう」と述べているように、漱石作品の中でも、特に評価の分れる作品ではあった。近年では、岩波文庫版『坊っちゃん』の解

説に、

『坊っちゃん』は数ある漱石の作品中もつとも広く親しまれている。直情径行、無鉄砲でやたら喧嘩早い坊っちゃんが赤シャツ・狸たちの一党をむこうにまわしてくり展げる痛快な物語は何度読んでも胸がすく。痛快だ。が、面白いとばかりも言っていられない。坊っちゃんは、要するに敗退するのである。(解説・平岡敏夫) などとも記されている。

そもそも、漱石の弟子である森田草平<sup>三</sup>が、「坊っちゃん」を、「作者は単純で生一本な坊っちゃんの性格と、複雑で持つて廻ったやっこい世間の常識とを対照せしめようとせられた。そこにこの作の作爲もあれば、澁澗たる新鮮味もある」<sup>三</sup>と、その作爲に言及していたように、「単純」で「生一本」、「澁澗たる新鮮味」、というのが読解における一つのキーワードでもあり、それが、解り易い作品として長い間教科書にも取り上げられてきた所以でもあるろう。

かつて私は、『猫』に描かれた世界について、現実世界に密着する「生」という意識の間に、時折垣間見える未知なる領域への漱石の示唆を指摘し、その対照的世界にあるものとして『漾虚集』を論じた。

初期作品執筆のころの漱石は、滞在していたロンドンで読み込んだウィリアム・ジェイムズを通して、「意識」に対する認識を自らの方法で捉えようとしていた時期にあり、現実の苦悩から一時的にでも脱却し、自我を解放するための領域を模索していたのであった。

本論では、そのような時期における漱石の執筆背景を探りながら、

作品に描かれている意識世界を考察する。

## 一、いたずら

「坊っちゃん」の冒頭は、「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている」と始まるが、この一文には、「坊っちゃん」の痛々しいほどの虚勢が表されている。

「一」(第一章)と、「二」以降についての分類は、小森陽一氏が「二章以後」を、「語られる時点の〈今〉に即した語り」<sup>四</sup>と指摘するように、四国・松山の中学校へ教師として赴任後がこの作品の主軸であり、まさに「坊っちゃん」の世界そのものではあるのだが、それ「以前」として示される幼いころのエピソードこそが、「坊っちゃん」が「坊っちゃん」たる大前提を讀者に敢えて知らしめようとする材として、まずは考察する必要がある。

子供時代の「坊っちゃん」が、自ら「大分やった」と回想するその「いたずら」の数々は、確かにどれも、「無鉄砲」でやんちゃなものばかりだが、それらには、何かと終結談がついている。

例えば、「小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした」終結には、「小使に負ぶさって帰って来た時、おやじが大きな眼をして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云ったから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた」というエピソードが付加されているように、子供ころのいたずらは、その延長上に親とのかかわりによって帰着した記憶を伴った形として「坊っ

「やん」の脳裏に保存されているのである。

「質屋の勘太郎」とのエピソードには「その晩母が山城屋に託びに行った」ことが、又、「茂作の人参畠をあらした」事件には「たしか罰金を出して済んだようである」思い出が、青年となった「坊っちゃん」の中に残っている。

これらを、主たる物語軸、(小森氏の指摘を借りれば)〈今〉に到着する以前のプロローグ、単なる過去語りと収めてしまうことは容易だが、ただ、「坊っちゃん」を解く鍵は、案外この辺りに潜んでいるのかもしれない。

自ら、「おやじはちつともおれを可愛いがってくれなかった。母は兄ばかり鼻頂にしていた」というように、「坊っちゃん」の主人公には、幼少期、両親とのあたたかな思い出はほとんどない。

ところで、漱石作品の数々は、漱石自身の生涯との関連から、論じられることが多い。確かに作家夏目漱石・本名金之助の幼少期には、この「坊っちゃん」における「家族」のあり様と、類似している部分はある。漱石の生涯については、すでに拙著でまとめている部分も多いが、本論においても改めて触れてみたい。

『硝子戸の中』<sup>五</sup>に次のような描写がある。

私は両親の晩年になって出来た所謂末っ子である。私を生んだ時、母はこんな年齒をして懐妊するのは面目ないと云つたとかいう話が、今でも折々は繰り返されている。単に其為ばかりでもあ

るまいが、私の両親は私が生れ落ちると間もなく、私を里に遣つ

てしまった。其里というのは、無論私の記憶に残っている筈がなければ、成人の後聞いて見ると、何でも古道具の売買を渡世にしていた貧しい夫婦ものであつたらしい。

夏目金之助の出生は、決して幸満ちたものではなかった。生後間もなく里子に出され、また、同じ『硝子戸の中』に

私はいつ頃その里から取り戻されたか知らない。しかしじきまたある家へ養子にやられた。それはたしか私の四つの歳であつたように思う。

ともあるように、やっと実家に帰ってきたその後も、それほど時を経ずして養子に出された過去を持つ。また、漱石の自伝的作品とも言われる『道草』には、主人公の健三が、養父母との暮らしについて思いめぐらす箇所がある。

自分は其時分誰とともに住んでいたのだろう。

彼には何らの記憶もなかった。彼の頭はまるで白紙のようなものだった。けれども理解力の索引に訴えて考えれば、どうしても島田夫婦とともに暮らしたといわなければならなかった。

健三には、幼き頃の記憶が曖昧なところがあった。特に、「島田夫婦とともに暮らした」養家の風景ははっきりとしないままだった。この箇所については、江藤淳<sup>六</sup>が、「金之助は年老いた父親に拒否されたことによってひとりになり、自ら養父母を拒否することによって更にとりになっていた」と、漱石自身の生い立ちに纏わる事実を重ねて指

摘する通り、『道草』の中の健三が養父を「拒否し」ていたのは、まず、実の父親に「拒否され」ていた、という前提があったからこそ（傍点筆者）、の、幼児なりの精一杯の反逆、だともと言えるだろう。そのように心を閉ざしていたために、尚更

健三は自分の父と島田とが喧嘩をして義絶した当時の光景をよく覚えていた。しかし彼は自分の父に対してさほど情愛の籠った優しい記憶を有っていなかった。

とあるように、彼に実父との「優しい記憶」は全くない。

漱石が、主人公をして自らの幼児期について、「何の記憶もない」、「白紙のようなもの」としか振り返ることができないのは、その意思が及ばぬ深き領域で、記憶が「ないもの」と封印されている所以なのかもしれない。

さて、「坊っちゃん」を考えると、「おやじは些ともおれを可愛がってくれなかった」、「母は兄ばかり鼻肩にしていた」という主人公「おれ」の背景に、作者漱石の生い立ちを重ね合わせることは可能である。両親から愛されていなかった幼少期の哀しさ、それが「坊っちゃん」に投影されている。ただその一方で、先にも指摘したように「坊っちゃん」のいたずらの記憶には、常に家族が沿っているのはなぜだろう。

まず、作品執筆の時系列を確認すれば、先に示した『想い出すことなど』は明治四十三年十月から、『道草』に至っては、大正四年の六月から「朝日新聞」に連載されているのであり、「朝日新聞」専属作家として熟成期を迎えていた漱石が、自らの過去を振り返り、総括的に記

したものと考えることもできよう。

しかしこの「坊っちゃん」は、一九〇五（明治三十九）年に発表された、漱石が作品を書き始めて間もないころのものがある。そしてちょうどそのころは、約二年にわたる英国留学からの帰国後に着任した第一高等学校や、東京帝国大学英文科の講師などを兼任していた時期である。

そもそも漱石が、処女作『猫』を書く契機となったのは、高浜虚子からの勧めであり、当時のことについて、虚子は次のように記している。

ある時私は漱石が文章でも書いて見たならば気が紛れるだろうと思ひまして、文章を書いて見ることを勧めました。私は別に気にも留めずにおつたのでありまして、果して出来るか、出来んかも分らんと考えておつたのでありました。<sup>七</sup>

つまり、あくまでも、小説執筆の動機となつたのは、「気が紛れるだろう」との勧めがあったからであり、その時期の段階での作品ということを鑑みれば、「坊っちゃん」に描かれた「家族」についての背景には、作者漱石自身の幼児期があることに加え、さらに当時漱石をとりまいていた家族の姿が投影されているようにも思われる。すなわち、「坊っちゃん」の一章で、それぞれの「いたずら」の終結に家族からの救済を必ず添えるこの記憶語りの数々は、当時の漱石自身を解くことで、見出すことも可能となる。

例えば、次のようなエピソードもその一つかもしれない。

夏目鏡子『漱石の想い出』<sup>ハ</sup>に漱石が英国留学中の談として次のような箇所がある。

書こう書こうと思ひながらも、朝のうちは子供たちのお守をしたり午後になると針仕事でもだしたり、そんなことをしているうちに夜になって、夜は夜で疲れて眠くなるといつたぐあい（中略）  
中々いざ手紙を書くといふ時がありません。

筆不精でもあった妻、いくら手紙書いてもなかなか戻ってこない返信をいら立ちながら待ち続け、やっと届いた短い返事にほっとする。留学費用の不足、計り知れない異国の地での孤独感にさいなまれ、次第次第に神経症が悪化していた当時の漱石にとって、待ちわび尽くしてやっと手にした妻からの手紙こそが、家族による、小さな救済の間であつたとも推測するには難くない。

そんな、ふとした「家族」とのかかわりのなかでもたらされる瞬間が、こうして『坊っちゃん』の、「無鉄砲」ないたずらの終結部に、さり気なく添えられているとも読めるだろう。

「気を紛らす」ために取り掛かった処女作『吾輩は猫である』に描かれているのは、いうに及ばず、当時の夏目家の日常にほど近い風景だった。鏡子が「夏の始め頃かと覚えて居ります。どこからともなく生まれていくらもた、ない小猫が家の中に入ってきました」<sup>九</sup>と回想するように、一匹の猫の出現でもたらされた夏目家の小さな変化を材として、書き始められた作品には、漱石の一分身であるとも読める登場人物が登場するのだがそんな『猫』の中に、「主人に云わせると教師は

どつらいものはないそうで彼は友達が来る度に何とかかんとか不平を鳴らしている」という一節を挿入してしまっているほどに、帰国後の教師としての自らを、決して良しとはしていなかった状況にあったことも、又、当時の漱石を読み解く一つの要因でもある。

漱石が初めて教職に就いたのは、明治二十五年、彼がまだ帝国大学文科大学英文科在学中でもあった時期で、主として、学費補給の目的で東京専門学校（現在の早稲田大学）講師として英文学などを担当した。また、翌明治二十六年には大学院へと進み、学長の推薦を受けて、東京高等師範学校の英語科講師にも就任している。

当時のことについては後に、講演「私の個人主義」<sup>一〇</sup>の中で、  
とうとう高等師範の方へ行く事になりました。／＼しかし教育者として偉くなり得るような資格は私に最初から欠けていたのですから、私はどうも窮屈で恐れ入りました。（略）しかしどうあつても私には不向きな所だとしか思われませんでした。奥底のない打ち明けたお話をすると、当時の私はまあ肴屋が菓子家へ手伝いにいったようなものでした。

とも振り返っているが、こうして積極的に就いたわけではなかった教職へのいきさつは、『坊っちゃん』の、「おれ」の動機ともつながって行く。

また、漱石が明治三十八年五月九日に、友人村上半太郎宛に送った書簡には、次のようにつづられている。

小生は教師なれど教師として成功するよりはへボ文学者として世

## 『坊っちゃん』論

に立つ方が性に合うかと存候につき是からは此方面にて、一奮発仕る積に候然し何しろ本職の余暇にやること故たいしたものも不出来ただお笑い草のみに候

倫敦時代からの苦しみは、「文章でも書いて見たならば」と提案されるほど、傍からも顕著にわかるものだった。異国の地にあり、他に馴染まず、ひたすら文学研究に没頭することでまとめ上げた「文学論」だったのではあるが、帰国後の教壇でいくらその講義を重ねても、そこに熱意は沸いて来ず、だからこそ、教師という仕事への懷疑は、『猫』を執筆し始めたことでより、より深められていたのだろう。

そんな中で、ほぼ同時期に書かれていた作品のひとつがこの『坊っちゃん』であるならば、まず、主人公の幼き頃のベースとなっている「家族」の描写に、漱石が思いを重ねていたのは、彼が後年発表することとなる『道草』に込められた、あの幼少期の記憶だけではなく、当時の家族の風景であったとも読み取れることは難くない。

となると、改めて「おれ」である「坊っちゃん」が、過去の記憶として振り返る、数々の「無鉄砲」故の失敗や可笑しみを含む豪快な思ひ出に、いつも、どこかしらで救済の手が差し伸べられて来た（と、彼自らを納得させているようにも伺える）ことはうなずけよう。当時の、「おれ」の意識の奥深くに、家族というものへの秘かなる思いが、自ずと潜み出ていたのかもしれない。

すなわち、「一」に書かれているのは、「二」以後で書かれる（今）での基盤となっている、「場」でありルーツの確認なのである。それは、

「二」以後、すでに成長してしまっている「坊っちゃん」の主人公「おれ」が、（今はもう崩壊してはいるものの）自らのベースとなった家族という「場」に対する秘められた希求であり、その確認作業だったのかもしれない。

そして、この方向性こそが、「坊っちゃん」を貫く姿勢ではあるように思われる。

## 二、家族と清

「いたずら」語りのそれぞれに、必ず、家族からの救済がついて回っていたことが、さり気なく添えられているように、「一」で語られる、それ以外の幼き頃の風景にも同様の志向性が見られる。

母が病気で死ぬ二三日前台所で宙返りをしてへっつい角で肋骨を撲って大いに痛かった。母が大層怒って、お前のようなものの顔は見たくないと云うから、親類へ泊りに行っていた。するととうとう死んだと云う報知が来た。そう早く死ぬとは思わなかった。そんな大病なら、もう少し大人しくすればよかったと思つて帰つて来た。

この部分もまた、ひとつの「いたずら」で、「坊っちゃん」の「二」以降で語られる（今）のエピソードではない、思い出語りの話である。ただし、それは、先の「学校の二階から飛び降り」や、「質屋の勘太郎」とのエピソードとは少々異なる特徴がある。

「母が病気で死ぬ二三日前」の出来事だという、この幼子の「台所」

での「宙返り」は、果たしてどんな意味を持つか。母親はおそらくこの時は、病床に伏していた状態だったろう。けれども、「兄ばかり鼻屑にし」ている母に対して、弟である幼な子はどうしても素直になれはしなかった。本当は、可愛がられている兄のように（もちろん、このとき、兄がどこにいたのか定かではないのだが）、病気の母の傍にいて、一緒に過ごしていたかった。しかし、日ごろから「些ども」「かわいがってくれな」いことを実感している彼は、台所でただ一人、あえて乱暴に大きな音を立て、「宙返り」をしているしか術をもたなかったのであらう。これは、いわゆる、子どもの「試し行動」のようなもの一種ではなからうか。

そもそも、「試し行動」は、子供が親・里親・教師などの保護者に対して、自分をどの程度まで受けとめてくれるのかを探るために、わざと困らせるような行動をとることをいい、とりわけ虐待を受け、大人を信頼していない子供に特に強く見られるものであるという。「坊っちゃん」もまた、いくら疎んじられようとも、なんとか気にかけてほしいと望む、幼き子なりの精一杯の存在証明的行為であったのかもしれない。

それでも、母は、わかつてはくれなかった。あばら骨を打ってどんなに痛がり、泣き叫んでも、「お前のようなものの顔は二度と見たくない」と突き放した。「坊っちゃん」の主人公がこれほどまでに誇大にふるまってでも欲していたのは、自分にも優しくしてほしいと願うが故の、母親からのあたたかな母性だったともいえるだろう。

「いたずら」についての思い出語りの中で「坊っちゃん」は、親から言われてきた言葉を様々繰り返している。それは例えば、「おれを見る度にこいつはどうせ碌なものにはならない」という「おやじ」の言、「乱暴で乱暴で先が案じられる」という母の小言などで、父や母からそのような言葉を言われるたびに、当時子どもであった「おれ」は、おそらく、さらなる「無鉄砲」ないたずらや、乱暴を繰り返していたのかもしれない。けれども、思い出語りをしている現在時にあつては、こうして過去を振り返り、むしろ、当時言われた親からの、否定的言葉の数々に、どこか妙に同意して、納得しているような向きもある。「なるほど碌なものにはならない。御覽の通りの始末である」、「行く先が案じられたのも無理はない」というように、自らを、親の言っていた通りだと纏めてしまっているのである。

すなわち、「坊っちゃん」は、幼き頃の親との関係において、両親から受けた否定的な言葉ばかりがいくら脳裏に焼き付いていても、それでも「親子」というつながりを、彼なりに大事なものとしているのだろう。いたずらは、親にこちらを見てほしいから、乱暴は、なにより、「親譲りの無鉄砲」が故、だめだだめだ、と言われても、それでもやはり「坊っちゃん」にとっての肉親は、自分を「年中持て余していた父」と、自分に対して「とうとう愛想をつかした」その母であり、決して「坊っちゃん」の側からは、親を拒絶してはいなかった。

初作の『吾輩は猫である』の中で、突如登場した猫が、  
吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなは

## 『坊っちゃん』論

だ不人望であった。どこへ行っても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかった。いかに珍重されなかったかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に在る事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかったからやむを得るのである。(傍線・筆者)

と淡々と語っていたように、苦沙弥先生の家に居ついても「はなはだ不人望」であったその猫は、誰もかわいがってくれないのなら、気にかけてもくれないのなら、いっそこちらから向かつて行こうという意気込みで、「主人」の傍に纏わりつくようになっていた。「坊っちゃん」であればなおのこと、たとえ、いくらもてあまされ、愛想をつかされていようと、血を分けた本当の両親は、彼にとつてはやはり親なのである。だからこそ、〈今〉である現在時、それを振り返って語る時には、親が「碌なものにはならない」と言っていたように、なるほど「御覧の通りの始末である」と、親の言葉を肯定しているのである。

ただし注意しておきたいのは、こうして、否定され続けていた「坊っちゃん」が、そのために、「どうせおれは……」という自己否定へと自らを閉じ込めてしまっているわけでは決してないであろうということである。「坊っちゃん」が、幼少期の思い出語りから始めているのは、自らを卑下する志向などではなくむしろ、逆の志向であり、「二」以降

の〈今〉での活躍を澆刺と語り始める時間軸に向けた、ある矜持ともいえるのではあるまいか。これについては、後段で詳しく触れてみたい。

ところで、「坊っちゃん」において、「清」という下女の存在については、これまでも多く論じられている。

例えば江藤淳は、新潮文庫の解説の中で、「『坊っちゃん』を名作にしているのは、この作品に底流している暖かさだ」と指摘する。最後に「坊っちゃん」が帰っていった場所が「清の家」であったことを取り上げて、「究極には地の底の、疵なるものの潜む場所です」「そここそ漱石の渴望する暖かさの源泉があった」と述べる。また、佐藤の、「清の背後にあの『母なるもの』の本源としての母千枝のイメージが重ね合わされていることは疑いあるまい」との見解もある。

確かに、清は、家族の中にあつて爪弾きにされていたこの次男坊にとって、唯一の理解者であり、心強い味方であった。清の存在をどう読むか、それもまた、一つの大きな課題ではあるが、本論においては、これまでの見解とはまた少し別の角度から、この清を読み解いてみたい。

清が「坊っちゃん」の言に初めて登場するのは、母親が死んだ後、「おやじと兄と三人で暮らしていた」ことが明らかにされたのちである。兄弟喧嘩が高じ、「おれ」を「勘当する」と言い出した父親に、「十年來召し使っている清と云う下女が、泣きながらおやじに詫言まつて」とりなしてくれたエピソードがそれである。



すなわち、幼少期の思い出から語り始めた章である「一」において、清は、冒頭からは登場していない。先にも指摘したような、いたずらをした数々のエピソードの中での救済措置的終結は、あくまでもそこに父や母がかかわってなされていたことであり、その時には清の存在には一切触れられていなかった。もちろん、いったん登場したそれ以後は、付かず離れずなにかしら、「坊っちゃん」の昔語りの中に出てくるが、清の登場の時間差をどうとらえるかということも、一つのポイントとなるだろう。

おそらく母の存命中にあっても（「十年來召し使っている」とあることから）、清はなにかにつけて「坊っちゃん」の世話を焼き「おれを非常にかわいがってくれ」ていたに違いない。ただ、どんなに清が、庇い鼻根をしようとも、それに対して「坊っちゃん」は、時折は、「不思議なものである」、「少々気味が悪かった」などと、少し冷めた目で見ていたことなどから、そこには、清側の「坊っちゃん」に対する思いとは、別の距離感がうかがえる。それは、清からの一直線な愛情の方向とは異なる冷静さなのであり、たとえば、「時々は小供心になぜあんなにかわいがるのかと不審に思った。つまらない、よせばいいのにと思った」というような表現にも表されている。

おそらく、真つ直ぐに自分に愛情を向けてくれる清に対して「坊っちゃん」が、こうして時には「気の毒だ」とさえ思うのは、「坊っちゃん」にとつての清が、母でも祖母でもない、あくまでも「奉公してくれている、優しい婆や」だから、なのである。

優しい女中である清は、いつも味方をしてくれて、彼女の身内である甥にさえ、奉公している家の子「自慢」を繰り返している。「坊っちゃん」は、そんな清を見て、「自分の主人なら甥の為に主人に相違ないと合点したものらしい。甥こそいい面の皮だ」と、甥の側に立ったうえでの同情さえ示す。もちろん、それは一種の照れ隠しのような嬉しさともいえるが、他方、これらの距離感とは、やはり清が「坊っちゃん」にとつて、身内とは違う存在だ、という一つの観方からの所以であらう。清と甥との関係がそうであるように、「坊っちゃん」にとつては父や母がまず第一のつながりで、清とは、そうした血縁関係とは違う。系図に組み込まれる「家族」ではないのだ。

「坊っちゃん」という作品は、冒頭の一文が示すように、まず、「親譲り」の「無鉄砲」からすべてが始まっているのである。そして、そこに、清が優しいばあやとしても寄り添って、その暮らしは成り立っていた。こうして「坊っちゃん」にとつての基盤となっているこの幼少期は、清という緩衝材的な存在を含んで、〈今〉における何よりもよりどころとなっている。だからこそ「坊っちゃん」は、ここから始まっているのである。

### 三、田舎嫌いの意味

さて、「一」でのいきさつを踏まえて、いよいよ、「二」以降において、〈今〉として語られる四国での物語がはじまるが、「坊っちゃん」を読むたびにいつも思うのは、地方に赴任した「坊っちゃん」が、な

ぜ、これほどまでに「訪れた場所」に対して辛辣な表現を用いているのかということである。

例えば、瀬沼茂樹が「まさにわれわれが周囲にみるようなみみっちい日本の性格を、無邪気で単純な正義感という他の日本の性格から批判した」二作品と論じていることから言えるように、江戸子気質の坊っちゃんが、「みみっちい日本の性格」を持った典型的「卑俗」さを、バツバツと痛快にやり込めていくユーモア小説と読むとするならば、その「地方性」は単なる一つの比喩として、あまり重きを置かずに読み過ぎすることもできるかもしれない。けれども、やはり、その「地方」的な部分に対する「坊っちゃん」の視線には、単純に笑い飛ばすことができない違和感を覚える。

総じて、「坊っちゃん」には、「田舎」という言葉が三十一回登場しているが、多くの場合、そこには「東京」が引き合いに出され、そのいずれにも、やはり肯定的な感は含まれない。

作品中、初めてそれが出現するのは、「坊っちゃん」が卒業した物理学校の校長から、松山への赴任を持ち掛けられた場面である。

卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だろうと  
 思つて、出掛けて行つたら、四国辺の中学校で数学の教師がいる。  
 月給は四十円だが、行つてはどうだと云う相談である。おれは三  
 年間学問はしたが実をいうと教師になる気も、田舎へ行く考えも  
 なかった。尤も教師以外に何をしようかと云うあてもなかったから、  
 この相談を受けたとき、行きましようかと即席に返事をした。(傍点

筆者)

思いもかけず赴任を進められたその場所に対して、なんの考えもなくすぐさま「田舎」という代名詞を使っていることから明らかなように、「坊っちゃん」にとつて、「四国辺」というその場所は、現在地・東京からは、まったく別の遠い地との認識である。

国土交通省の「日本鉄道史」の資料によれば、当時の交通について神戸から新橋まで二十時間以上かかっていたことが確認できるので、都会育ちの「坊っちゃん」が、未知なる遠方を、「田舎」という言葉で括るのに、その明るくストレートな物言いの中に、ある種の(都会的)驕りのようなものが含まれているように見えるのは仕方がないのかもしれない。

「二」の冒頭、神戸から汽船に乗り継いで、(今)の時間軸上にある赴任地に降り立ったときの「坊っちゃん」は、「人を馬鹿にしていらあ、こんな所に我慢が出来るものか」とかなりの言い草で、この地を断じている。そもそも「坊っちゃん」が「東京」以外に行った経験といえ、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時ばかり」というのだから、見るものすべてが(東京と)異なる赴任地をすぐさま理解できるわけはないのだが、それにしても、引き受けた仕事をするため赴いたその土地に、自ら積極的に入りこんでいこうとする気概が、最初から一切感じられないのはなぜであろう。

むしろ、前出の引用部にもあるように、赴任を引き受けたときは、「田舎へ行く考えも何もなかった」が、ほかに「何をしようかと云うあ

でもなかった」という程度の、いわば、成り行き任せの決定であったので、その時点においては、それほど拒絶は示していなかったことは伺えよう。「引き受けた以上は赴任せねばならぬ」、「どんな町で、どんな人が住んでいるか分からん。分からんでも困らない。心配にはならぬ。只行くばかりである。」と、「行く」ことに、前向きであつたような姿勢も見られる。

ところで、こうした、それまでの生活領域から別の地への移動を伴う設定は、その後の漱石作品にも度々描かれている。例えば、「草枕」や「三四郎」、「坑夫」などにもそれは見られるが、ただ、それらどの作品にも、「東京」対「田舎」という対比の背景に、この「坊っちゃん」のような、あからさまな嫌悪の表出のようなものは示されず、また、それが物語を構築する、決定的なものとなつていとは言い難い。ただ、あえてそれを一つの大きなテーマとしてみたとき、『三四郎』という作品を対照化することは可能だろう。

三四郎も、「自分は田舎から出て大学へはいったばかりである」と出身地である熊本を、「田舎」という言葉で示している。これは、「坊っちゃん」のそれとはまったく逆の方向性である。

そして、三四郎にとつての東京は、  
東京で驚いたものはたくさんある。第一電車のちんちん鳴るので驚いた。それからそのちんちん鳴るあいだに、非常に多くの人間が乗ったり降りたりするので驚いた。次に丸の内内驚いた。もつとも驚いたのは、どこまで行つても東京がなくならないというこ

とであつた。(略)すべての物が破壊されつつあるようにみえる。そうしてすべての物がまた同時に建設されつつあるようにみえる。たいへんな動き方である。

と示されているように、目まぐるしく変化する巨大な都市であつた。「たいへんな動き方」をしている東京の実情を、上京するまで全く知らずにいた三四郎が、直接目の当たりにした時、まず思つたのは、「この劇烈な活動そのものがとりもおさず現実世界だとすると、自分が今日までの生活は現実世界に毫も接触していないことになる。洞が峠で昼寝をしたと同然である」という感慨で、その時の彼は、生まれ育つた故郷について、「現実世界に毫も接触していな」かつた、「昼寝」の場にしか過ぎなかつたと啞然とする。

三四郎は、自分の周りで激しく動く都市に戸惑つて、世界はかように動揺する。自分はこの動揺を見ている。けれどもそれに加わることはできない。自分の世界と現実の世界は、一つ平面に並んでおりながら、どこも接触していない。そうして現実の世界は、かように動揺して、自分を置き去りにして行つてしまふ。

とあるように、一人「置き去りに」されてしまふ不安を感じながら、あたふた動きを繰り返し、同化を試みようとするのだが、結局はただその大都市を目の前にふわふわたようばかりであつた。対して、そんな田舎から東京への三四郎の移動とは、全く逆のベクトルが見られたのが、「三四郎」よりも二年余りに前に発表されていたこの「坊っちゃん」論

ん」なのである。

三四郎は、現実世界に「置き去りに」される不安を感じたが、「坊っちゃん」はこの地を自らの（幼少期を過ごした東京という中心の）時間軸から「置き去り」にしている。彼自身が積極的に、田舎に居る自分の周りに、透明なバリアを張り巡らせて、この地への溶け込みを拒否している。「坊っちゃん」とっては、あくまでも、それまで過ごしていた東京が「現実」で、赴任地は、三四郎が感じていたような「昼寝」する「田舎」でしかなかったのであった。

こうした「坊っちゃん」の「田舎」に対する見方は、漁村の港に着いてすぐ、「中学校はどこだと聞いた」ときの、「小僧はほんやりして、知らんがの、と云った。気の利かぬ田舎ものだ。猫の額ほどな町内の癖に、中学校のありかも知らぬ奴があるものか」や、また、到着後の宿屋で茶代を渡すときの、「田舎者はしみつたれだから五円もやれば驚いて眼を廻すに極まっている」などにも読み取れる、きわめて挑戦的な気概でもあって、以後、始まっていく〈今〉の生活で、一切変わることはない。

更にいくつか取り上げてみよう。

自分がした事を笑われて怒るのが卑怯じゃろうがな、もしと答えた奴がある。やな奴だ。わざわざ東京から、こんな奴を教えに来たのかと思つたら情なくなつた。（傍点筆者・以下同）

「わざわざ東京から、こんな奴を教えに来た」という言葉には、「東京者」である自身を、どこか、高い位置に置いてみているような勢いが

感じられるし、

それにしても世の中は不思議なものだ、虫の好かない奴が親切で、気のあつた友達が悪漢だなんて、人を馬鹿にしている。大方田舎だから万事東京のさかに行くんだろう。物騒な所だ。

「田舎だから万事東京のさかに行く」などというのは、全く無茶な理屈であり、挙句の果てには、どうあつても、馴染むことなどできないこの赴任地を、一刻も早く出たがつて、

どうしても早く東京へ帰つて清といっしょになるに限る。こんな田舎に居るのは墮落しに来ているようなものだ。新聞配達をしたつて、ここまで墮落するよりはましだ。

というように、この地にいること自体が、「墮落」だとさえみなしている。

もちろん、これらの暴論は、江戸っ子者のちゃきちゃきとした気風の良さ、若者が故の小気味よいほどの爽快さ、をあえて際立たせるための比喩的素材であり、それこそが、作者漱石が仕組んだ「笑い」のポイント、とみることも可能ではある。

漱石が落語に精通していたことはよく知られていることではあるし、また、漱石自身、明治三十九年の「文学談」三の中で、

『坊っちゃん』の中の「坊っちゃん」という人物は或点までは愛すべく、同情を表すべき価値のある人物であるが、単純すぎて経験が乏しすぎて、現今の様な複雑な社会には円満に生存しにくい人だなど読者が感じて合点しさえすればそれで作者の人生観が読者

に徹したというてよいのです。

と示しているように、「坊っちゃん」の東京との対比についても、「単純すぎて経験が乏しすぎ」る若者の直情的な言動に対する可笑しみ、とも読める。

ただ、それは、一方においては、どんな苦境の場にあっても、敢えて道化を装いながらすべてをその可笑しみの中に収斂させていくことで、自らを保とうとしている、ひどく危げな姿勢とも受け取ることができるのではなからうか。

そして、これほどまでに彼が、赴任地で過ごすようになっても常に「田舎」と言い続け、その地に対する一切の理解を示さないでいることには、また別の意味が見いだせる。それが、筆者が当初から感じていたある違和感の正体であり、そこには、ただの「単純」で「経験が乏し」い青年の、ユーモアを招く材料ともなるほほえましき、という見方だけでは済まされない、さらに強い拒絶の意味さえ見え隠れしているようにも思われる。

このことに対する一つの手がかりは、後期作品「こころ」に見ることが可能だろう。

「こころ」は、大正三年四月から朝日新聞に連載された作品で、やはり、「田舎者」に対するかなり辛辣な言い様が散見される。

例えば、次のような箇所である。

先生はその上に私の家族の人数を聞いたり、親類の有無を尋ねたり、叔父や叔母の様子を問いただした。そうして最後にこうい

った。

「みんな善い人ですか」

「別に悪い人間というほどのものもないようです。大抵田舎者ですから」

「田舎者はなぜ悪くないんですか」

私はこの追窮に苦しんだ。しかし先生は私に返事を考えさせる余裕さえ与えなかった。

「田舎者は都会のものより、かえって悪いくらいなものです。それから、君は今、君の親戚なぞの中に、これといって、悪い人間はいないようだといいましたね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中にあると君は思っているんですか。そんな鑄型に入れたような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断ができないんです」

これは、主人公の「私」が、自分の故郷にいる親類縁者を「別に悪い人間というほどのものもないようです。大抵田舎者ですから」と卑下した時、「先生」からの指摘にはとさせられる場面であり、「先生」は、「田舎者」について、「都会のものより、かえって悪い」と、むしろ大きな嫌悪感を示しながら「私」に説いている。

また、別の箇所にも、

私はその翌日も暑さを冒して、頼まれものを買い集めて歩いた。

## 『坊っちゃん』論

手紙で注文を受けた時は何でもないように考えていたのが、いざとなると大変臆劫に感ぜられた。私は電車の中で汗を拭きながら、他の時間と手数に気の毒という観念をまるでもっていない田舎者を憎らしく思った。

とある通り、「田舎者」であるからこそ、「他の時間と手数に気の毒という観念をまるでもっていない」のであって、むしろ都会の人間は、他者に対してはずけずけと、境界線を越えてまでその領域に踏み込んで来たりはしないと嘆いている。否、それは、「嘆き」というよりも「憎らしく思った」と、強い言い方で示しているほどの憎悪の念であろう。

他にも、『こころ』には、「私はしまいに父の無知から出る田舎臭いところに不快を感じ出した」や、「私は田舎の客が嫌いだった。飲んだり食ったりするのを、最後の目的としてやって来る彼らは、何か事があれば好いといった風の人ばかり揃っていた。私は子供の時から彼らの席に待するのを心苦しく感じていた」などの箇所もあり、これらは、「坊っちゃん」の「田舎」に対する見かたより格段に強い。

ただし、『こころ』におけるこうした強い嫌悪は、その「田舎者」が、善意に見せかけた策略家の親類縁者だったことにも起因した、深い絶望と人間不信によってもたらされた悲劇によるものであったので、「坊っちゃん」には、そこまでの悲惨さは見いだせない。ただ、「坊っちゃん」自身がこの田舎ではあくまでも余所者で、決してここには自分から迎合などしない、という自ら引いた一線を、強く保つ姿勢が見られるばかりである。

とかく、こうした地方における共同体意識では、たとえば、中根千絵が、

「ウチ」「ヨソ」の意識が強く、この感覚が鋭鋭化してくると、まるで「ウチ」の者以外は人間ではなくなってしまうと思われるほどの極端な人間関係のコントラストが、同じ社会にみられるようになる。(略)相手が自分たちより劣勢であると思われる場合には、特にそれが優越感に似たものとなり、「ヨソ者」に対する比例が大つびらになるのが常である。三

というように、「ウチ」「ヨソ」意識が極めて顕著に表れてくるが、それは、現代においてもいくつもの悲惨な事件<sup>四</sup>につながっているような、「ウチ」の者」側から引かれる線であろう。けれども、この『坊っちゃん』では、ふとした偶然でやってきてしまった「ヨソ」者である「おれ」が、自らその壁を作り上げているのである。

たとえばそれは、「坊っちゃん」が、赴任した中学校で生徒たちとの交わりを語るとき、親しく関係を築いている描写が誰に対しても一切ないことからわかるだろう。「バツタ」事件での生徒たちとの言い合いの場面で、「坊っちゃん」が彼らを示すのは「生徒」という一般名詞だけであり、かろうじての個人の特定は、「真先の一人」、「一番左の方に居た丸い顔の奴」などの言い方で、一度もその名前を示さない。むしろ、「けちな奴等だ」、「話せない雑兵だ」、「こんな腐った了見の奴等」というように、ほとんどが十把一絡げであって、散々な言い様である。このような傾向は、生徒に対してばかりでなく、個別で同僚たちを

示すのも、また下宿や町の人々に対しても見られることであり、そうした意識の方向性がすべて、「田舎者」へと集約されている。

三四郎は、目まぐるしく変化する巨大な都市東京の中で立ち尽くし、入り込もうと努力を重ねたが、「坊っちゃん」は、その反対に、自分はいくまでも「東京」から来た者」で、田舎には決して交わらない、強い意志を示した。それは、「坊っちゃん」が「東京」に属する者として自らを認識することで、敢えて保とうとした大きな矜持でもあっただろう。

#### 四、「坊っちゃん」の寂しさ

ただ、一方においては、すでに本論「一」でも指摘したように、生まれ育った東京は、「坊っちゃん」にとって決して優しい場ではなかったのであった。彼に蘇ってくる思いは、いつも、家族から叱られ疎んじられていたことばかり、そして町内というコミュニティの中でも、「乱暴者の悪太郎と爪弾き」されていたというのであるから、そこまで彼が「東京」に誇りを持つのが一つの疑問ではある。

なぜなら、四国の赴任地でこうして、田舎に対する悪態を示すたび、早く東京に帰ることばかりを思う「坊っちゃん」に、すでに、東京に帰る家はない。

いくら彼が「東京は」「東京は」と、とにかく「帰る」ことにこだわっていても、幼少期を過ごしていた実家は、父の死後、「先祖代々の瓦楽多」を含めて、すべて兄によって処分されている。「兄は家売って

財産を片付けて任地へ出立すると云い出した。おれはどうでもするが宜かろうと返事をした」ともあるように、もはや戻る場すらない、そんな状態ではあった。

兄による実家の処分提案に何の抵抗も示さず、それ以後過ごした下宿もあっさり引き払い、東京を後にしたのなら、むしろ就職先である赴任地に積極的に入りこもうとするのが若者らしい澆漓さではなからうか。けれども「坊っちゃん」は、決してそうではなく、まるで敵地でもあるかように、その地で出会う人やもの、すべてに対して挑んでいる。その挑みは何であろう。

ここにおいても、「一」で述べた、過去に起こした無鉄砲なるいたずらを、さも自慢げに思い出語りしていたのと同様の、単なる「笑い」をもつて読み進めるだけでは済まされない、哀しさのようなものが伺える。それは、母の病床で精いっぱい宙返りをしていた「乱暴者」という幼子にも通底している心象で、「坊っちゃん」が田舎、田舎と声高に粋がるほどに、「坊っちゃん」の寂しさが増していくようにさえ読めるのだ。

先にも引用したように漱石は、「坊っちゃん」に、「単純すぎて経験が乏しすぎて、現今の様な複雑な社会には円満に生存しにくい人だな」と読者を感じ「てほしいと書いていたが、その読者に、むしろ、空気を出して、あえて立ちふるまっていなければならぬ、ナイーブな内面の存在を感じ取ってほしかったのではなからうか。そして、それこそが、このころの漱石が、無言で発していた叫びのようにさえ思え

てくる。「坊っちゃん」は、無鉄砲で、乱暴ものではあるが、それ以上に寂しく孤独なのだろう。それを、可笑しみの中で、無理して立ち尽くしている精一杯の青年として描いた。

それは、先にも言及した通り、この「坊っちゃん」の執筆が、「吾輩は猫である」連載途中の時期であり、また、それより以前、『漾虚集』に収められている小品が次々と書かれていたことから推察できるのである。

例えば「倫敦塔」は、「猫」執筆中とほぼ同期の、明治三十八年一月に「帝国文学」に発表された作品であるが、その中に次のような描写がある。

二年の留学中ただ一度倫敦塔を見物した事がある。(略)

行ったのは着後間もないうちの事である。その頃は方角もよく分らんし、地理などは固より知らん。まるで御殿場の兎が急に日本橋の真中へ抛り出されたような心持ちであった。表へ出れば人の波にさらわれるかと思ひ、家に帰れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑ひ、朝夕安き心はなかつた。この響き、この群集の中に二年住んでいたら吾が神経の繊維もついに鍋の中の麩海苔のごとくべとべとになるだろうとマクス・ノルダウの退化論を今さらのごとく大真理と思ひ折さへあつた。

「着後まもないうち」であつた漱石が、異国の地ロンドンで感じているのは、「まるで御殿場の兎が急に日本橋の真中へ抛り出されたような心持ち」で、周囲すべてに対して、「安き心はなかつた」と書いてい

るのだが、「坊っちゃん」に見られるのもまた、その心境に通ずるものではなからうか。「表へ出れば人の波にさらわれるかと思ひ、家に帰れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑」ってしまう、ひと時も安心できない見知らぬ土地でのこうした不安は、やがて、英語学と英文学との間で苦悩して、かの「文学論」序文に「世の命令さられたる研究の題目は英語にして英文学にあらず」、「世は単に語学を上達するの目的を以て英国に来れるにあらず。官命は官命なり。余の意志は余の意志なり」と記すに至るほどの、学問的苦悩へと繋がっていく。

江藤淳は、このころの漱石作品について、

「猫」を「ホトトギス」に連載していた当時の漱石が、それと併行して『漾虚集』の諸作を書いていたという事実には、著しくぼくの好奇心をそそるものがある。先ほど述べた彼の実生活とその低音部との相互作用がここには明瞭にうかがわれるので、「猫」の冷酷な風刺の背後から浮び上ってくる孤独な作者が、『漾虚集』のある作品の中ではその内面をたち割って、自らの内部に暗く澱んでいる深淵をさらけ出しているのである。<sup>一五</sup> (傍点は原文通り)

と述べているが、そうであるならばなおさら、この「坊っちゃん」における明るさの背後には、彼が、敢えてそうしなければならなかった、痛々しいまでの苦しみが潜んでいるともいえるだろう。すなわち、「一」でも述べてきたように、作品執筆にとりかかったきっかけが、「神経症」を紛らわそうと勧められてのことでもあつた漱石だったからこそ、こうして「坊っちゃん」にも、周囲にどうしても交わるこののできない



辛さが吐露されていると、読むこともできるようにも思われる。解けこめない田舎に解けこまない意地を保つことで、より強く意識される東京が、彼にとつてのアイデンティティそのものであったともいえる。

それが、赴任地を、ことごとく「田舎」というひとくくりの言葉で表し、また、その時にはいつも「東京」を引き合いにだすことで、決してまじわらない「自己」を認識しようとしている、一貫した姿勢として示されているのである。

後に『道草』の中で、

実家の父に取つての健三は、小さな一個の邪魔物であつた。何しにこんな出来損いが舞い込んで来たかという顔付をした父は、殆ど子としての待遇を彼に与えなかつた。父のこの態度が、生の父に対する健三の愛情を根こそぎにして枯らしつくした。

と書かねばならなかつたほど、「邪魔物」としての扱ひしか受けることができなかつた作者自身の幼き頃の記憶が、この時点ではあえて、それほど強く認識されてはいなかったにせよ、ロンドン留学を経ることで無意識に、「坊っちゃん」の中に創り上げられていた。ウチ側に居ながら、決して満たされない場所であつた実家。存在を認めてほしい、振り向いてほしいといくら強く願つても、所詮は「要らない子」であつた自身。里親からやつと実家に戻つても、決してよりどころとはならなかつた場所、それでも、彼にとつては、やはり、実家は実家であつた。そんな、子供のころの記憶をたどりながら、漱石は、自己の在り処を模索した。

それが、もはや、自身の形跡など、何も残っていない「東京」に、あえてこうして固執することで、そこにこそ、自己のアイデンティティが見いだせる場だという、半ば強引な自覚認識が、「坊っちゃん」の「東京」固執へと繋がっているともいえるだろう。

やがて「坊っちゃん」は最後に東京に帰る。

その夜おれと山嵐はこの不浄な地を離れた。船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。神戸から東京までは直行で新橋へ着いた時は、ようやく娑婆へ出たような気がした。山嵐とはすぐ分れたぎり今日まで逢う機会がない。

「その後逢う機会がな」かつたという山嵐は、戻ってきた「坊っちゃん」にとつては「東京」に含まれる存在ではない。なぜなら、東京で過ごした思い出に、彼は一切含まれてはいないのだから。

最後に、「坊っちゃん」は清について触れている。

清の事を話すのを忘れていた。——おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革鞆を提げたまま、清や帰つたよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰つて来て下さつたと涙をばたばたと落した。おれもあまり嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云つた。

これまで、この作品の最後に、こうして清について語られていることを、「坊っちゃん」は敗れたが、彼には帰るべきところがあった。それは清の家であり、究極には地の底の、<sup>六</sup> 舐なるもの<sup>の</sup>の潜む場所であつた<sup>一</sup>。や「清の背後にあの「母なるもの」の本源としての母千枝のイ

メージが重ね合わされていることは疑いあるまい」<sup>一七</sup> などの見解が示すように、清に「母」を象徴させている読み方が定説ではあるのだが、筆者は、本論「二」でも少し言及したように、清はあくまでも「坊っちゃん」にとつて、「優しい婆や」として居てくれる何よりの味方であつて、「母なるもの」、「母性」の象徴ではないと読む。むしろ、自己のアイデンティティを求めながらも、もはや生まれ育つた家も場も何もかもなくなつてしまつてゐる東京において、清という存在は、自身を見失わないための指標であり、必要不可欠な風景となつてゐるのである。「坊っちゃん」はそれを、こうして東京を一度離れることによつて、確実に獲得できた。そうした意味では、「坊っちゃん」の四国行きは、必要な時間でもあつたといえるだろう。

## 終わりに

「親譲りの無鉄砲」で、何かと「損ばかりしている」明るい「坊っちゃん」の内側に、無理して強がり、悪態をつき続けている寂しい「坊っちゃん」の姿を見ることで、当時の漱石の痛々しいまでの心情を、われわれ読者は感じ取ることができる。

そして、まだ初期作品であるこの時期には、果たしてそれ何なのか、作者自身も漠然としか気づいていなかったともいえないか。それが次第に、漱石の自己洞察へと模索が深められていき、中期・後期作品に見られる苦悩へと繋がられて行く。

漱石文学全体を、そして漱石という作家を理解するために、「坊っ

ちゃん」は極めて深く、読み応えある作品なのである。

## 注

- 一 佐藤泰正『坊っちゃん』の世界―諸家の論にふれつつ―（『国文学研究』一九七三、梅光女学院大学国語国文学会）
- 二 村山英太郎によると、「小宮豊隆氏の漱石研究は、科学的研究としてすぐれたものであり、自分のものは、弟子から見た漱石論」とつねづね語つていたという。（村山英太郎 森田草平『漱石の文学』（一九五四、社会思想社）解説より）
- 三 前同・森田草平『漱石の文学』（一九五四年二月、社会思想社）
- 四 小森陽一「表裏のある言葉―坊っちゃん―における〈語り〉の構造（上）（下）」『日本文学』（一九八三年三月・四月、日本文学協会）
- 五 夏目漱石『硝子戸の中』（一九一五（大正四）年四月初出、岩波書店）
- 六 江藤淳『決定版 夏目漱石』（一九七九年初出、二〇一六年九月、新潮社）
- 七 高浜虚子『俳句の五十年』（一九四七年初出、二〇一八年八月、中央公論新社）
- 八 夏目鏡子『漱石の想い出』（一九二九年初出、一九九四年七月 文春文庫）
- 九 前同
- 一〇 一九二二（大正三）年十一月二十五日 学習院輔仁会においての講演
- 一一 瀬沼茂樹『夏目漱石』（一九七九 東京大学出版会）
- 一二 「文学談」（漱石全集第二巻）
- 一三 中根千枝『タテ社会の人間関係 単一社会の理論』（一九六七年初出、二〇一〇年十月、講談社）
- 一四 たとえば、吉田修一『犯罪小説集』は、こうした地方性が垣間見える実在の事件がベースとなつて描かれている。
- 一五 六に同じ
- 一六 「坊っちゃん」の世界（佐藤泰正）
- 一七 六に同じ